自然気胸に対する胸腔鏡手術の検討
――在院日数に及ぼす因子について――

桑原　元尚[1)3)]　岩崎　昭憲[2)]　上田　仁[3)]
犬束　浩二[3)]　本廣　昭[3)]　高山　成吉[1)]
二見喜太郎[1)]　白日　高歩[2)]　有馬　純孝[1)]

[1)] 福岡大学筑紫病院外科
[2)] 福岡大学医学部第二外科
[3)] 国立療養所南福岡病院外科

要旨：50歳以下の若年者の自然気胸に対する胸腔鏡手術施行110側の臨床経過・手術手技・術後在院日数等を検討した．退院までの日数との相関は手術時間（r＝0.417），術後ドレナージ日数（r＝0.630）だった．術後ドレナージ日数は気漏消失日（r＝0.623）と相関し，術直後の胸部X線での肺膨張不全（t＝－6.7, p＜.0001）がドレナージ日数を延長した．肺膨張不全は手術時間（t＝－2.0, p＝0.045）の延長が発生の因子だった．再発率は13.6％でブラ・ブレブの性状や手術操作間での有意差はなかった．短時間で適切な手術手技を行うことと，術直後に肺をなるべく早く膨張させることが，術後のドレナージ日数および退院までの日数を短縮させるために重要な因子と考えられた．

索引用語：自然気胸，在院日数の短縮